

仲重の頭す。平前：神の人(円)

奪う

『インターネットは自由を奪う』アンドリュウ・キーン著、中島由華訳 どうしたら「ぼくたちのインターネット」を取り戻せるのか——。ネットによつ

経済・文化格差は広がり、ネットは問題を助長している。政府はネットや巨大IT企業への規制を強めよ。シリコンバレーのインサイダーが、これからのネットと社会のあり方を探る。(早川書房 2484円)

文庫

『新しい中世』明彦著、禾野中世について、「新中世」

民国家たらんとする序が崩壊した「混沌類し、ポスト近代の迫る。原本は1996年(講談社学術

「なき人々の戦後史」

鎌田 慧著 聞き手・出河 雅彦

や護憲集会などにいいほど舞台に立る著者の本業はルある。膨大なルボきた著者だがそのデビュー当時から『している。タイト「声なき人々」にじみせ、書き留め、一が許されているのってきた。なぜ？る側や少数者側から全体が見えやすい。2014年3月

犠牲を被る側から見る

農民が土地買い上げを迫られ分断され散って行く。同じ光景を成田空港反対闘争でも見た。権力側の横暴をこれ以上許すなどばかり、闘争やカンパを呼びかけるピラ書きまで引き受けた。罪なき民が虐げられるのを座視できない。その典型が冤罪事件だ。弘前大教授夫人殺害事件、財田川事件、狭山事件で被害者を励ます。「原発は安全」と書く朝日の科学記者が著者と鋭く対決した。やがてフクシマの重大事故発生。勝負はついた。罪なき民の苦しみはJR事故、公害や炭坑事故でも顕著だ。後遺症で苦しむ夫を世話しながら著者に「地獄です」と語る家族を取材し、励ます。

ルボの意義を著者は「情報や

ジャーナリスト 長沼 節夫 評

話題を提供するだけではない。現代をテコに未来をこじ開ける「ことと言つ。つまり「今」という時代の歴史を書き続けているのだ。上・下合わせて779頁の大著だが、今や「鎌田山脈」とも呼べる膨大なルボ周辺のエピソードと伝記がここに詰まっていると思えばおトクだ。(藤原書店 上下各3024円)

かまた・さとし 1938年

生まれ。新聞記者、雑誌編集者を経て、ルボライター。いだがわ・まさひこ 1960年生まれ。新聞記者。

男子劣化社会

フィリップ・シンバルドー、ニキータ・クローロン著 高月 園子 訳

ニート、ひきこもり、草食男子。これは男性の生涯未婚率が23%といわれる現代日本特有な現象なのかと思っていたら、アメリカでは事態はもっと進行していた。1980年代から2000年代初頭に生まれた人々で世帯をもっているのは3人に1人。その大半が実家で親と暮らしているという。30歳未満では学力的にも経済的にも女性が初めて男性を上回りつつあり、親と住む率が女性よりも男性の方が25%も高い。「男子劣化社



ひそかに発する危険信号

からイメージする。その結果、リアルな女性とのコミュニケーションからより一層遠ざかるようになる、という。

しかし本書を読み進むと、その背景にあるのは、これまでの「ファミリー幻想」の崩壊であることがわかる。マイホームを購入し、高額なサラリーを得て、家族を支え、家族を愛する男性像。その実は、家族の中で孤立し、誰も父親と深い会話をせず、給料運搬人となる。家族に生き血を吸われる「カエル男」からの逃避が、現在のアメリカ人男性の「逃避行動」を生んでいる。伝統的な結婚像、家族像の崩壊に、ネット社会が巧みに入り込んだというべきだ。

大阪大学准教授 深尾 葉子 評 (社会生態学)

深尾 葉子 評

本書は、その解決策として、政府、学校、家庭、ネット、メディアの役割などを提案するが、彼らの回避行動を単に「病的」とみなすのではなく、社会のフレームワークの破たん信号と捉え、我々が「正しい」とイメージする社会をどれだけ変えてゆけるか、がむしろ課題だ。フェミニズムの時代からミサンドリーの時代へ？ 男性がひそかに発する危険信号に耳を傾ける時がきているのかもしれない。(晶文社 2160円)

フィリップ・シンバルドー 米国心理学会会長など歴任。

離した性的像をかなり早い年齢

2017年10月2日(月)

「地元は沸いた。開拓時あたかも「むつ小